広報かみす

Kamisu public relations

2024年
3/1
No.409

神栖ディスカバリー File 09

特集

舎利浜とうつろ舟

江戸時代のUFOミステリー

Pick up

4月1日からごみの分別などが変わります …P6〜9
防災訓練を実施します! ……P10
かみすの医療 vol.5 ……P12

江戸時代、UFOのような乗り物が常陸国（ひたちのくに）の海岸に漂着し、中から不思議な服装をした女性が現れたとされる『常陸国うつろ舟奇談』。この奇談と神栖市との関わりを紹介します。

※写真は『鹿島郡京舎ヶ濱漂流船のかわら板ずり』（船橋市西図書館所蔵）と舎利浜

AR 広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは18ページ
【COCOAR】

市メールマガジンはコチラ

神栖ディスカバリー File 09

特集

舎利浜とうつろ舟

江戸時代のUFOミステリー

『兎園小説』11集に記された「虚舟（うつろぶね）」。円盤型の舟・奇妙な文字・謎の女性が描かれている（昭和女子大学図書館蔵）

私たちのまちが舞台となったミステリー『常陸国うつろ舟奇談』をご存じですか？　近年になって新史料の発見が相次ぎ、注目を集めています。研究が進んでも謎が尽きない、不思議な魅力に満ちた奇談に迫ります。

実体のあるUFOミステリー

江戸時代、神栖の浜に宇宙人の乗ったUFOがやってきた――。

いきなりそう言われても、荒唐無稽に聞こえるかもしれません。でも、このUFO伝説のもとになった『常陸国うつろ舟奇談』は、江戸時代の古文書がいくつも残り、民俗学の分野ではよく知られています。滝沢馬琴が『兎園（とえん）小説』に記し、柳田國男が論文を書き、澁澤龍彦が小説のモチーフとし、今も多くのミステリーファンを引きつけています。文献によって細かい違いはありますが、兎園小説のあらすじは次のとおりです。

1803年（享和3年）、常陸国の〝はらやどり〟という浜の沖合いに円盤型の舟が現れた。舟の上部には窓があり、舟内には奇妙な文字が書かれている。異国人のような風体で言葉の通じない女性が一人、大事そうに箱を抱えて乗っていた――。

現在までに、14編13種類（未確認・写本を入れるともっと多数）の古文書が見つかっていますが、それらには共通して円盤型の舟・奇妙な文字・謎の女性の絵が描かれています。

この奇談について、うつろ舟研究の第一人者で岐阜大学名誉教授の田中嘉津夫さんは、「知り得る限り世界で唯一の〝実体のあるUFOミステリー〟」と表現します。なぜなら、遠い昔に書かれた江戸時代の古文書に、〝UFOそっくりの乗り物の絵〟という物的証拠があるからです。

田中教授

『水戸文書』と金色姫、驚きの大発見

調査のため何度も神栖市に訪れて

『漂流記集』に描かれたうつろ舟（部分、西尾市岩瀬文庫蔵）

『鹿島郡京舎ヶ濱漂流船のかわら板ずり』。史料の文中、中央やや右側に「舎ヶ濱」の文字が見える（船橋市西図書館所蔵）

「水戸文書」（個人蔵）。描かれた女性の姿と蚕霊尊の特徴が酷似。金色姫伝説との関連性が高まった

いる田中さんは、私たちの身近なところで一体どんな発見をし、うつろ舟の謎に迫っていったのでしょう。そのワクワクするエピソードを紹介します。

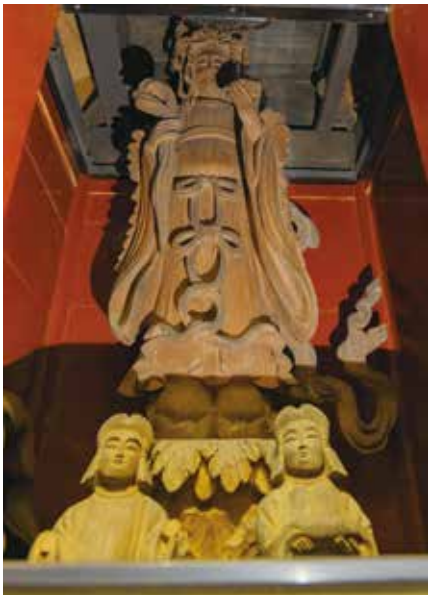
田中さんがうつろ舟奇談の研究を始めたのは1998年ごろ。調査を進めるほど謎解きの面白さに魅了され、2009年には『江戸うつろ舟ミステリー』を出版しました。すると翌2010年、水戸に住む読者から、関係のある古文書を所有していると連絡が入ります。これが『水戸文書』で、後に驚きの発見へとつながります。

さっそく水戸へ行って現物を調査し、その帰りに神栖市の星福寺に立ち寄ったそうです。滝沢馬琴が星福寺の養蚕信仰のお札を書いており、その版木を確認するのが目的でした。

「その折、蚕霊尊（金色姫立像）を写真に撮らせてもらいましたが、当時はうつろ舟奇談が金色姫伝説に関連するとは考えておらず、特に詳しく調べませんでした」

神栖市日川地区は、6世紀中頃に金色姫が天竺（今のインド）から養蚕を伝えた、日本の養蚕発祥の地と伝えられています。蚕霊山千手院星福寺に伝わる金色姫伝説は、584年（欽明帝13年）に金色姫が流木に乗って日川に流れ着き、発見した漁師に養育され、後に変化し、白い蚕に生まれ変わって人々に養蚕を伝えたというものです。

さて、岐阜に帰った田中さんは、蚕霊尊と水戸文書の写真を眺めていたとき、驚いて思わず声を上げました。



星福寺の蚕霊尊（金色姫立像）と厨子

『伴家文書』（川上仁一氏所蔵、写真提供：田中嘉津夫氏）の発見で、うつろ舟の漂着地が舎利浜である可能性が高まった

舎利浜

「どちらの衣装も、前帯の二段蝶結びが同じだと気がついたのです。2つの女性像が〝うつろ舟〟という同じキーワードを持ち、珍しい前帯デザインまで一致するのは偶然ではあり得ないと思いました」

他にも、目の形がお多福のような三日月形をしていること、頭に鷹らしい飾りがついていることなど、いくつもの共通点が見つかりました。

「うつろ舟奇談と金色姫伝説の関連を示唆する学術的価値のある発見は初めてであり、興奮しました。これは、茨城県の郷土史家・故佐藤次男さんの仮説の正しさを示すものでもあります」

漂着地が舎利浜と判明！

その後、不思議なほど『常陸国うつろ舟奇談』に関する新史料の発見が相次ぎます。その中で私たちに関わりが深いのは、2014年に発見された『伴家文書』です。

「兎園小説に書かれているうつろ舟の漂着地〝はらやどり〟という浜は一体どこなのか、長年にわたって郷土史家やUFOファンが熱心に探しましたが見つかりませんでした。架空の地名と考えられていたのに、伴家文書に漂着地が〝常陸原舎り濱〟と記されているのを見つけて驚きました。実在する地名なら、周辺の郷土史を調べて奇談の謎の解明に迫ることができます」

常陸原舎り濱は伊能忠敬の地図でも確認でき、現在の波崎地区の舎利浜にあたります。波崎町史によると、舎利浜に人が定住するようになったのは地引網漁が発展する1872年（明治5年）とされており、江戸時代には住む人はなく砂丘が広がっていたようです。

「これまで舎利浜、星福寺、蚕霊神社には8回ほど調査やテレビ番組の取材で訪れています。最近では、2022年の夏に米国の動画配信サービスNetflix※のUFO番組のため、舎利浜での取材に参加しました」

Netflixの取材班と田中さん

2019年には田中さんの著書の英語版が出版され、うつろ舟奇談は海外でも知られるようになっています。

大胆な仮説と最大の謎

田中さんは、『伴家文書』に加え『新古雑記』『異聞雑記』をオリジナルに近い伝説が記された初期3文書と分類し、「それらに共通する女性の描写は、成長する蚕を表しているのではないか」と、大胆な仮説を立てました。例えば、青白い顔＝蚕の幼虫の色、赤黒い眉と髪＝さなぎの色、白くて細い歯＝繭の色と表面模様、白いベール＝生糸、といった具合です。うつろ舟の謎の女性が蚕の化身であるならば、ますます金色姫伝説との関連が強くなります。

このように新史料の発見によって研究は進んでいますが、まだ多くの謎が残されていると田中さんは言います。

「最大の謎は、現代のUFOを知らないはずの江戸時代の人々が、どうしてUFOによく似たうつろ舟の絵が描けたのか。なぜ、奇談を伝える文書がこんなにも数多く残っているのか。何らかの事件が実際にあったのではないか。そして、20世紀の米国、江戸時代の日本という時間も場所も文化も遠く隔たったところで、どうして同じような〝UFO型の乗

※NetflixはNetflix,inc.の登録商標です

り物に乗る異界からの訪問者〟の話が出現したのか。これらの謎は、世界中の人々の好奇心を刺激して止みません」

ミステリーの舞台は、今

さて、うつろ舟ミステリーの舞台である舎利浜に立ったとき、田中さんはどのように感じたのでしょう？

「兎園小説を読んだ私の頭の中には、――青い松林、広く白い砂浜、沖まで続く遠浅の青い海……。沖に見える奇妙な舟に向かって小舟を引き出す漁民の〝あれは何だ？〟という声――というアニメ映画のような情景が浮かびました。しかし舎利浜で見たのは、遠くに望む鹿島臨海工業地帯のコンビナートなど、思っていた情景とは少し違いました。しかし、はるか沖を眺めると柳田国男が言う『常陸の濵には今も昔も、此種の不思議を談ずる気風が旺盛であったらしい』の雰囲気を実感しました」

確かに今では、砂浜を守るヘッドランドが建設され、視界の先に風力発電の巨大風車が見え、当然ながら江戸時代とは様変わりしています。そんな私たちが見慣れた舎利浜の風景に、うつろ舟奇談を重ねて眺めてみると、いつもと違う気持ちになるかもしれません。

一方、江戸時代から受け継がれているものもあります。それは、蚕霊神社の酉祭です。明治時代の神仏分離まで蚕霊神社と星福寺は一体であり、酉祭は明治末期まで3日間盛大に行なわれていました。現在でも地域住民によって大切に受け継がれ、11月最初の酉の日に行なわれています。

最後に田中さんから神栖市の皆さんへのメッセージをいただきました。

「常陸国うつろ舟奇談は、世界的にもユニークな神栖市の民俗資産であることは間違いありません。この奇談には、想像し、推理する楽しさがあります。いろいろな可能性を考えながら、蚕霊神社や星福寺を巡り、舎利浜でUFOや金色姫伝説に思いをはせて、ミステリーを解くアイデアを考えてみてはいかがでしょう！」

江戸時代とは様変わりした風景

江戸時代から受け継がれる蚕霊神社の祭礼

蚕霊山 千手院 星福寺

欽明帝13年開基。星福寺山門の脇には「金色姫伝説」を伝える石板があり、「縁起によれば桑の宇津魚舟が塩路常陸なる豊良浦に漂流。時に欽明帝十三年(584)」と記されている。また、舛田高順住職によると「養蚕の祈願所として江戸時代の初めに大本堂を建立し、参詣の人々で埋め尽くされた」といわれている。

蚕霊尊のお札を刷るための版木

蚕霊尊を模して作られた高さ約20㎝の像